

平成10年度

豊かな感性を育む造形活動

— 様々な感覚に訴えかける素材を通して子どもの変化を探る —

川崎市総合教育センター 図工・美術科研究会議

豊かな感性を育む造形活動

— 様々な感覚に訴えかける素材を通して子どもの変化を探る —

図工・美術科研究会議

川合 克彦¹
大内三喜男⁵

松下 友子²

森井 治子³

東川美英子⁴

要 約

図工・美術科は、表現や鑑賞といった造形活動を中心に、色や形、素材といった子どもたちの心に直接響く要素を扱うことで、美しさに感動したり、よさを感じたりして自分の思いにしたがい、自由に表現することが可能である。これは表現したり鑑賞したりすることで感じる心を豊かにさせ、感動する心を育むことができるということである。しかし、子どもたちが「どのように感じたのか」そして「それがどのように表現に結びついたのか」といった感覚や感性についての論議は、まだなされていないのが現状である。感性はこれまで様々な研究の中で定義がされてきたが、一般的にはニュアンスで語られることが多く、「感性」がどのように育まれるのか、そして、育まれたということをもどのように見とるのかということについては課題を残している。

本研究会議では「感性」を育む視点として、子どもたちが自らの心に素直に感じるということに着目し、どのような活動が子どもたちの心を開き「感性」を育むことにつながっていくのか、また育まれたことをどのように見とるのかを子どもたちの活動する姿から明らかにしていきたいと考えた。そこで子どもたちが対象にどのようにかかわっていくのか、その過程を探るために①「出会い」②「思いの芽生え」③「思いの表現」④「試行錯誤」⑤「完成」⑥「共感」の6つの視点を持った。それぞれの視点で子どもたちの行動や表情、つぶやきを観察し、感性が育まれる条件を導き出すことで「感性」が育まれるプロセスを探った。

キーワード：図工・美術科、造形活動、感性、価値観、表現

目 次

I 主題設定の理由	38	(1) 検証授業のねらい	42
1. 研究の意義	38	(2) 検証授業の実際	43
(1) 図工・美術科の特性	38	(3) 抽出児の記録	44
(2) これまでの問題点	38	4. 検証授業からの考察	47
(3) 造形活動の基本的な考え方	38	(1) 抽出児の変化	47
(4) めざす子ども像と研究の主題	39	(2) 抽出児の作品から	48
2. 研究のねらい	39	(3) 感性が育まれる条件	49
3. 研究の仮説	40	(4) 感性が育まれるプロセス	50
4. 研究の経過と方法	40	(5) 検証授業後の変化	51
(1) 研究の経過	40	III 研究の成果と今後の課題	52
(2) 研究の方法	40	1. 研究の成果	52
II 研究の内容	41	2. 今後の課題	52
1. 造形活動における対象とのかかわり	41	おわりに	52
2. 検証の視点	41	参考文献・資料、指導助言	52
3. 検証授業	42		

¹ 川崎市立向丘中学校教諭（主任研修員）

² 川崎市立宮前小学校教諭（研修員）

³ 川崎市立久地小学校教諭（研修員）

⁴ 川崎市立平中学校教諭（研修員）

⁵ 川崎市総合教育センター指導主事

I 主題設定の理由

1. 研究の意義

(1) 図工・美術科の特性

図工・美術科の授業は表現や鑑賞といった造形活動を通し、児童生徒の思いを大切に、新たなものを生み出す創造活動の能力の育成や創造することの喜びを味わう学習である。また、美しいものを求め、美しさを表現しようとする心情を育てることを目的としている。特に表現や鑑賞といった造形活動は、色や形や素材といった自らの心に直接的に響く要素を扱うことで個々の思いを直接的に表現することが可能である。美しさに感動する心を素直に、子どもたちが自由な方法で表現する事ができるということは、表現したり鑑賞したりすることで感じる心を豊かにさせ、感動する心を育むことができるということである。

このような造形活動は、年齢を問わず生涯を通して豊かな心を育み、人間形成にかかわっていくものと考えられる。

(2) これまでの問題点

これまでの図画工作科や美術科の学習においては、作品の「出来具合」の評価に重きが置かれる授業が展開されることが多くあった。そのような授業の中では、個々の子どもたちの表現に至るまでに感じた様々な思いや表現する喜びと、作品の「出来具合」との間には、隔たりができてしまい、図工や美術の授業で苦手意識を持つ一因になってしまっていた。

このような反省に基づき、新しい学力観、指導観が示され、各学校で児童生徒中心の造形活動が実践され、研究会を通して子どもたち一人一人の思いが生かされる主体的な造形活動のあり方等が報告されている。それぞれの実践においてもいろいろな素材を使い、これまでになかった表現方法を工夫し、新しい作品が創造されている。そのような造形活動の作品は、個々の子どもたちの思いが色や形に表現された作品に仕上がっている。しかし、ここではまだ「どのように表現するのか」という話題が中心であり、「どのように感じたのか」そして「それがどのように表現に結びついたのか」といった感覚や感性についての論議があまりなされていないのが現状である。

過去の研究においても、子どもたち一人一人の「感じる」ということがどのように彼らを変容させたのか。また子どもたちが自分なりの思いを持つ、豊かな感性を育

むための題材は何かということについては課題を残している。

(3) 造形活動の基本的な考え方

子どもたちにとって造形活動は、対象からの刺激を様々な感じたことで驚いたり、新たな発見をしたり、感動したりしたことで表現するなど、それぞれの心が揺り動かされたときに起こる内面の問題そのものである。そして新たなものに出会う、自ら気づくという常に新しい活動でもある。

特に表現活動の中で子どもたちは、主体的な造形活動を通し、対象とのかかわりの中で様々な感覚を働かせる。そして、対象のよさや美しさを発見し、驚いたり感動したりしながら色や形、素材を使い、「もの」をつくる。「もの」とのかかわりの中で試行錯誤を繰り返しながら個々の思いを実現していく。

このような活動の中で、知識や技術とともに、子どもたちの活動の方向性を担うのは、その子の持つ「感性」だと考える。そして、この感性こそ子どもたちの人間性の育成に通じるのではないだろうか。なぜなら、なにを感じ、どのような価値観を持ってどのように感動するかは、その後の子どもたちの生き方に少なからず影響を与えると考えられるからである。

一般的に「感性」については様々なとらえ方が存在し、意味や使われ方に微妙な違いがあった。はっきりとした認識というよりはニュアンスで語られることが多くあったように思う。

美術教育におけるこれまでの研究においても、感性は様々な定義がなされてきている。代表的なものとして竹内博氏¹⁾は感性の捉え方を感覚と感情の2側面からなるものとしている。感覚は外的なものに対して分析的な特性を持つ。全一的な心的傾向をもつものが感情であり、行動に向かうエネルギーを有する。感覚は感性の理性的な(ロゴスの)側面、感情は感性の情動的(パトスの)側面ということができると定義している。

また片岡徳雄氏²⁾は、感性について知性や感情の働きをおこさせる「初発」であり「驚きの反応」である。そして、単なる感覚ではなく「価値あるものに気づく感覚」としている。

遠藤友麗氏³⁾は「感性」を美しさや神秘、畏敬、人情、人の立場や気持ち、命のいとおしさ、愛情など、価値や意味、情緒などを心に感じる力。一言でいえば「心に価値を感じる力」ととらえている。

¹⁾ 竹内 博『美術教育を学ぶ人のために』 世界思想社 1995年 P.13

²⁾ 片岡 徳雄『子どもの感性を育む』 NHKブックス 1995年 P.75

³⁾ 遠藤 友麗「美術教育」1月号 No.667 教育美術振興会 1998年 P.74

そこで、これらの考え方をもとに、造形活動における「感性」を子どもたちの姿の中に置きかえて考えてみた。竹内氏や片岡氏のいうように「感性」とは単なる感覚ではない。子どもたちが様々な対象に出会い、そこでいろいろな感じ方をする。感じたことが子どもたちの心の中に変化をもたらす過程が「感性」の働きであると考えた。

我々は、造形活動における「感性」が新たなものを生み出す創造活動の初発であり、美しいものを求め、美しさを表現しようとする力に通じるものと考えた。つまり造形活動における「感性」とは子どもたちが様々な活動をする中で、

対象からの刺激を様々な感じ、
新たな価値を形成しながら表そうとする力の源

ではないだろうか考えた。つまり、造形活動でいう、新たな価値の形成とは、子どもたちが自分らしく感じられることで人間形成をしていく。また、「豊かに個性を伸ばしていく」姿をイメージした。そして、「表そうとする力の源」とは、表現する力に通じるとともに、表さずとも、感じたことで、様々な思いを持つことも指し示すこととした。

(4) めざす子ども像と研究の主題

感性が豊かに育まれれば、子どもたちは対象に対して心を開き、様々な感じ方ができるようになったり、能動的で多様な関わりを持ったりすることができる。そして、豊かな感受性で対象を捉え、様々な発見や対象の持つ美しさやよさに気づくことができるようになる。

このように豊かに心が揺り動かされれば、自らの感動とともにそれを表現しようとする子どもたちの思いも強くなるものと考えられる。そして、個々の思いが多様であればその表現も一人一人多様であろうと思う。

このような造形活動をする事により、子どもたちは、自らの思いを表現しようと活動し始める。対象の美しさやよさを感じたままに、色や形を駆使しながら表現しようとするからこそ、創造的な活動の育成にほかならないと考える。

そこで、研究主題を

豊かな感性を育む造形活動

と考えた。

現代の子どもたちの生活環境からは、対象からの刺激

に対して様々に感じ、主体的に対象と関わり、様々な感覚を総動員して驚いたり、新たなことに気づいたりする体験の場や機会が少なくなっている。これは、子どもたちの様々な感覚からの情報が少なくなるということであり、豊かにイメージする能力や想像する能力を低下させ、自らの感覚に置き換えて考えることも困難にさせているのではないだろうか。

子どもたちが対象からの刺激を様々な感じられるように、そして、豊かな価値を形成していくためには、いろいろな感覚に多様に働きかける素材を用意する必要がある。そして、子どもたち自身が自らの感覚を様々な生かして、対象の美しさやよさ、活動の楽しさ、表現する喜びを感じ、美しさやよさに気づくという行為が大切である。このような活動を通して、子どもたちの心に生じる変化を見とることができれば、感性が育まれていくプロセスを検証できるのではないかと考えた。そこで、副主題として

様々な感覚に訴えかける素材を通して
子どもの変化を探る

というテーマを掲げた。

2. 研究のねらい

先行研究を調べてみると、鹿児島県総合教育センターの「感性を育む教育の在り方に関する研究」¹⁾では、感性を「外界からの刺激や自らの働きかけた対象の中に価値あるものを感じ取り、更によいものを求めようとする心の働き」と定義し、各教科で実践研究がされているが、「豊かな感性を育むための題材とはどのような題材が適当であるか」については課題を残したとしている。

広島大学附属三原小学校での研究²⁾では感性を「人間及び人間を取り巻くあらゆる事象に対する感じ方」と定義している。そして、感性を構成する要素として「感覚」「感情」「想像力」「共感性」の四つをあげ、多角的な実践研究が行われた。しかし、どの研究においても子どもたちの感性が育まれたことをどのように見とり、どのような点で感性が育まれたと判断するのか、ということについては言及されていない。

そこで、本研究会議では「感性」を育む視点として、自らの心に素直に感じることに着目し、どのような活動が子どもたちの心を開き「感性」を育むのか、授業実践を通し、児童生徒の表現や行動を観察することで明らか

¹⁾ 鹿児島県総合教育センター「研究紀要、第85号」 1997年

²⁾ 広島大学附属三原小学校教育研究会 『感性を豊かにする授業』 1993年

にしていきたいと考え、以下の3点をねらいとした。

○子どもたちが造形活動の中で何を感じ、どのような思いを持ったのか、その活動を追う中で変化していく子どもたちの様子から探る。

○活動する子どもたちの姿から、感性が育まれていくプロセスや条件を明らかにする。

○子供たちの感じたことが、どのように表現活動に結びついていくのか、子どもたちの作品から探る。

3. 研究の仮説

造形活動において、どのような題材が子どもたちの感性を豊かにしていくのかを明らかにできればと思う。その題材を通し、子どもたちが活動をしていく中で、何を感じるのか。子どもたちが対象を様々に感じ、自ら価値を見だし、主体的に活動に向かう姿を通して感性を育んでいく様子やその過程を見とりたい。

子どもたちが実際に対象や材料と出会う。この時、子どもたちは様々な感覚を総動員して、対象や材料を把握しよう向き合う。その対象や材料の放つ色、形、音やにおいを感じ、実際に触れてみることで驚きや新たな発見をするであろう。「見てみたい」「触ってみたい」といった欲求が子どもたちに生まれれば、様々に感じ自らの価値を形成しようとする姿勢が発見できるのではないだろうか。

そこで、題材の中で取り上げる対象としては、子どもたちが主体的にその対象とかわり、様々に感じようとする対象を準備し、かかわる場を工夫する。そして感性が育まれていく最初の過程が「感じる」ことであれば、視覚からの発見、触覚からの発見、聴覚からの発見など様々な感覚を駆使してかかわろうとする子どもの姿が見られるであろう。そのような活動の中では、新たな発見や驚きの機会は増えるであろう。その結果、子どもたちが自らの作品として思いを込め、かかわっていく過程が見えてくると考える。

そこで、研究の仮説を次のように設定した。

様々な感覚に訴えかける素材によって、子どもたちが主体的にかかわり、対象に美しさやよさを見出すことのできる活動を行えば、自らの価値を形成していく過程で、子どもたちの感性が育まれる様子を見とることができるであろう。

4. 研究の経過と方法

(1) 研究の経過

[1年目]平成9年度

・過去における感性の定義、感性についての先行研究を調査
・実験授業

久地小学校 1学年

「まほうのこな」9月16日(火)

・実験授業

平中学校 2学年

「風、火～そのフォルム～」

～粘土の触感からの模索～

11月25日(火)

[2年目]平成10年度

・研究構想の見直し
・感性の育まれるプロセスの考察
・プロセスに基づいた検証授業の立案
・検証授業

宮前小学校 5学年

「森のおくりもの」6月16日(火)

自然素材での造形遊びから、表現活動へ変化する過程を探る。

平中学校 2学年

「木の色、森の形」7月8日(水)

屋外の雑木林の中で、自然素材を描画材料として自らの表現を創造するまでの過程を探る。

・感性が育まれるプロセスを分析、仮説に基づいて考察する。

(2) 研究の方法

子どもたちの造形活動を観察し、活動する姿を通して子どもたちの「感性」が育まれる様子を見とることにした。

そこで、下記の6つの視点を設け、検証授業を組み立ててみた。その6つの視点が①出会い ②思いの芽生え ③思いの表現 ④試行錯誤 ⑤完成 ⑥共感である。

検証授業の中では、抽出見を選び、参加観察をすることで見とる方法をとる。

第1の観察者が抽出見につき添い、他の子どもたちとも共感しながら観察する。そして、抽出見のつぶやきや行動を追いながら内面を推測する。第2の観察者は、客観的に抽出見と第1の観察者の外側から表情や行動を追う。第3の観察者は、授業をする教師自身である。授業を進める上で全体的に観察し、その手応えから推測する。第4の観察者は、その教師を客観的に観察することとした。

また、検証授業後、アンケートを実施し、子どもたちの内面を探る手がかりとした。

II 研究の内容

1. 造形活動における対象とのかかわり

仮説をもとに子どもたちが対象とどのようにかかわるのかを考えてみた。

子どもたちが自らの感覚で、対象に進んでかかわる造形活動からは、イメージが芽生えたり、イメージをもとにかかわってみようとする思いが芽生える。思いを持つということは、自ら意図的に対象とのかかわり、よさや美しさ、楽しさに気づいたり味わったりすることである。意図的なかかわりからは、自分の思いを表してみたいという表現に向かおうとするかかわりが生まれる。そして、自らの思いを表現しようとする過程では、試行錯誤があるであろう。

造形活動の中で子どもがどのように対象とのかかわっていくのか、それぞれの学習過程における対象とのかかわりを考えてみた。

【造形活動における子どもたちの対象とのかかわり】

活動の過程	子どもたちの対象とのかかわり
題材把握	①出会い (主体的な対象へのかかわり)
発想構想	↓ ↑ ②思いの芽生え (意図的な対象へのかかわり)
表現	↓ ↑ ③思いの表現 (表現に向かおうとするかかわり)
	↓ ↑ ④試行錯誤 (試行錯誤からのかかわり)
	↓ ↑ ⑤完成 (達成感と対象へのかかわり)
鑑賞	↑ ↓ ⑥共感 (共感することでのかかわり)

子どもたちの対象へのかかわりは、活動の過程とともに進行するだけでなく、それぞれの矢印が示すように様々な活動の過程で多様に見られる。

2. 検証の視点

活動する過程の中で子どもたちは、様々な対象とのか

かわり方をしていく。このかかわり方に視点を置き、どのような活動において、どのような思いを抱き、変化していくのかを探ることとする。そして、具体的にどのようなかかわりをする中で豊かな感性を育てていくのか、そのプロセスを追う検証の視点を考えてみた。

検証授業の活動を追う中で、予想される子どもたちの具体的な活動の姿を考えてみる。その中から「感性」が育まれていく様子を示す「みとりの視点」を考えてみた。

①出会い (主体的な対象へのかかわり)

出会いは、対象とのかかわりの中でとても大切な視点といえる。どのような対象とどのように出会うかは、その後の展開に大きく影響することが考えられる。子どもたちが自らかかわれる場を大切にしたい。

この視点では対象と初めて出会うことによる驚きや発見、疑問や関心など対象に対する興味から始まる。

具体的なみとりの例	みとりの視点
<ul style="list-style-type: none"> ・驚いているとわかる発言 ・感動しているとわかる発言 ・疑問に感じている発言 ・表情が変わる ・目が輝く ・興味の対象へと主体的に動く など 	<ul style="list-style-type: none"> ・驚く ・発見する ・疑問を持つ ・関心を持つ ・興味を持つ ・好奇心がわく など

②思いの芽生え (意図的な対象へのかかわり)

対象との出会いで生じた興味や関心などは、子どもたちに様々なイメージを生む原動力を与える。子どもたちは自ら持ったイメージとともに意図的に対象にかかわっていく。

具体的なみとりの例	みとりの視点
<ul style="list-style-type: none"> ・何を(どの素材を)最初に手にしたのか ・何を多く触っていたのか ・何をしようとしたのか ・感動しているとわかる発言があったか ・目が輝く など 	<ul style="list-style-type: none"> ・発見する ・対象の美しさやよさに気づく ・アイデアが生まれる ・味わう ・かかわる ・イメージを持つ など

③思いの表現 (表現に向かおうとするかかわり)

何を表現するのか、自分なりの表現主題を決定し、対象にかかわろうとする。

ここでは、どのような色や形に興味を持ったのか、あるいは、どんな材料を選択し表現しようとしている活動なのかによって、表そうとする気持ちが、どのように働いているのかわかる。また、素材そのものの味わいや用具を使う上での抵抗感など感覚を楽しみ、味わいながら自分の思いをはっきりさせていく。最初のイメージから変化し、発展していく子どもたちも出てくるであろう。その変化などを明らかにすることで何によさや美しさ、楽しさを見いだしているのかわかる。

具体的なみとりの例	みとりの視点
<ul style="list-style-type: none"> 素材をどのように加工したのか 表現するイメージや方向性はあるのか どのような感覚に興味を持ち表現しようとしたのか 表現の方向性は変わったのか <p style="text-align: right;">など</p>	<ul style="list-style-type: none"> イメージの有無や変化 表そうとする対象や活動のよさや楽しさに気づく 味わう 工夫する 集中する 知識を獲得する <p style="text-align: right;">など</p>

④ 試行錯誤 (試行錯誤からのかかわり)

活動していくに従い、子どもたちは様々な困難にぶつかる。しかし、困難にぶつかるということは、子どもたちの中に表現しようとする能動的な姿勢があるということでもある。

表現しようとするイメージに対して現実が伴わない場合、困難が生じるわけだが、どのようなところに困難を感じるかを観察することで、子どもたちが、どのようなことに関心を抱いていたのかわかる。

子どもたちは困難を解決しようと、違った方法で対象にかかわろうとする。このような活動の中には友達から学んだりする共感の視点も内在する。

具体的なみとりの例	みとりの視点
<ul style="list-style-type: none"> どのような困難にぶつかったのか なぜ困難と感じたのか どうやって克服したのか 克服したときにどのような発見があったのか <p style="text-align: right;">など</p>	<ul style="list-style-type: none"> 試行錯誤する 工夫する 新たな価値に気づく 発見する 知識を獲得する <p style="text-align: right;">など</p>

⑤ 完成 (かかわりの振り返り)

表そうとする気持ちを達成することができたか。自らの力を感じ取り、表現する喜びを味わうことができたのかなど、子どもたちが造形活動の中にどのような価値を見いだしたのか。また表現しようとする力が育まれたのか見とるポイントは多い。

具体的なみとりの例	みとりの視点
<ul style="list-style-type: none"> 完成したか 達成感はあるか 作品をアピールすることができたか 作品にどのようなテーマを持ったのか 何をみてほしいのか 何が楽しかったのか 何に夢中になったのか 何が苦しかったのか 思いに発展性はあるか <p style="text-align: right;">など</p>	<ul style="list-style-type: none"> 振り返る 感想を持つ 思いを託す 自分や自分の作品のよさに気づく 意欲が持てたか 次の課題を持つ さらなる思いを持つ <p style="text-align: right;">など</p>

⑥ 共感 (共感することでのかかわり)

活動が終了し、全体で鑑賞してみる。あるいは活動の中でアイデアのヒントを見いだす。自分と同じであったり、自分とは違った価値観を他の作品や活動そのものの中で発見する。

具体的なみとりの例	みとりの視点
<ul style="list-style-type: none"> どのような感想を持ったのか 何をまねようとしたのか 他のよさを発見することができたか 自分と違う意見を発見できたか 自分の作品に対する他者の意見にどのような感想を持ったか <p style="text-align: right;">など</p>	<ul style="list-style-type: none"> 他の人やその作品のよさに気づく 発見する まねる 味わう 興味をもつ 関心を持つ <p style="text-align: right;">など</p>

3. 検証授業

(1) 検証授業のねらい

子どもたちが実際に対象と出会うときに、子どもたちが様々な感覚を使って対象や材料に向かわざるを得ない、

そのような心揺さぶられる題材をと考えた。「見てみたい」「触ってみたい」「してみたい」と言った子どもたちの興味や関心からスタートする活動は、対象に対して子どもたち自身が自らの価値をどのように形成したのかを見とれるであろう。その結果、創造的な表現が生まれるということは、個々の感性が影響すると考えたからである。

授業は小学校、中学校それぞれで行った。小学校の場合は材料となる対象を布で覆い、「なんだろう」という興味からスタートさせた。中学校では、屋外に出て、思いっきり体を動かすことのできる自然観察林で授業を行った。斜面をかけ登ったり、降りたり、草木に触れることができる環境が、子どもたちの心をどのように揺動かしたのかを観察した。

(2) 検証授業の実際

○検証授業1 (小学校)

様々な感覚に訴えかける対象をと考え、材料は葉や木の枝といった素材を中心に、つる、わらなど自然の素材を集め提示してみることにした。題材名「森からのおくりもの」である。対象からの刺激に集中させ、それによって心が揺り動かされることで始まるプロセスを追うために、部屋の中にそれらの材料を持ち込んだ。

子どもたちが自らの感覚で材料を味わい、その中から自ら感じ、気づくということを重視した。そのため導入段階でのイメージの提示はひかえ、材料は布でわざと覆った。題材名についても子どもたちには授業の段階では知らせず開始した。様々な感覚を駆使して遊ぶ中から個々の表現の欲求が生まれるまでの変容をみとろうと計画した。

・小学校抽出児 A (男子) のプロフィール

『図工の時間の A は、授業中、教師の話をしかりと聞くことができるのだが、導入の時間が終わり、個人的な活動になると戸惑ってしまうことがある。そばに行くと尋ねると「わかんない。」という。授業が進行しても「わかんない。」「できない。」という繰り返しが多い。教師の励ましの言葉により、表現しようとするが、思いに自信が持たず、自らの主題が持たないことが多い。集団の中で思いを発表することが苦手で、声も小さく、常に周りのことが気になる様子である。しかし、心根は優しい。休み時間は教師のまわりに集まる子どもたちの後ろから、遠巻きに見ていることが多い。早く心を許せる友達ができることを願っている。』 (A 担任談)

・学年

5年生 (男子18名、女子14名、計32名)

・題材名 「森からのおくりもの」 (造形遊びをもとに)

活 動 内 容	予想される子どもの動き
①出合い ・布で覆う、シルエットで見せるなど興味を喚起する。 ・布の上から触ってみる。	・布に覆われた対象に出会う。何だろうと好奇心がわく。 ・触感や臭いを味わい、たたいたりして音をさせてみる。
②思いの芽生え ・布を取り、対象と出会う。 ・材料となる対象で遊ぶ。	・手にとって触感や色、形に興味を持つ。 ・おもしろい形や心地よい手触りを味わう。味わったことからイメージを持って見立て遊びをする。
③思いの表現 ・対象から受けた思いを広げ、思いにかなったものへと作り替えようとする。 ・新しい表現を試してみる。	・対象からのイメージを大切にしながら形や色を考えて組み合わせたり接合したりする。 ・新しい発見に喜びを感じ、思いを広げていく。 ・材料用具の抵抗感から活動の満足感を味わう。
④試行錯誤 ・困難な活動にぶつかる。 ・友達の活動を見る。友達に教えてもらう。	・試行錯誤の中から新たな価値観を見いだす。 ・友達の活動の良さを発見する。 ・思いにあった表現を友達と喜び合う。
⑤完成 ・完成する。	・充実感を味わう。 ・次の活動に期待感を持つ。
⑥共感 ・作品を見合う。	・作品を見合うことで、友達や自分のよさ、感じ方に新たな発見や感想を持つ。

・検証授業の結果

題材名が示されず、材料となる対象は、スクリーンのシルエットで登場したり、布をかぶっていたりしたことで「なんだろう」という好奇心を生み出すことができた。好奇心は自らの感覚で感じ、確かめようとする活動へつ

ながら、主体的に対象とかかわる原動力になったように思われる。全体的に活発な活動ができ、2日間続けて授業を行うことができたため、活動の様子も把握することができた。子どもたちが、それぞれ、思い思いの主題をもとに熱心な活動ができたように思う。

○検証授業2 (中学校)

検証授業を行う中学校には校庭内に自然観察林がある。小規模ではあるが、木々が自然のままに近い場所である。

この題材では、子どもたちが自然の中で、心を解放することにより様々な感じ方をしていくかわりから始まる。体に受けた風、木の感触、土の暖かさなど、直接あるがままの自然の素材と十分にふれあい、感じたことから新たな価値を形成し、自らのイメージをパネルの上に表現する。しかも表現するための用具や素材は準備せず、そこにある自然の素材から表現材料を見つけだし、つくり出す。題材名を「木の色、森の形」とし、美を見つけ出す力や想像力を伸ばしていく様子を見とっていききたい。

・中学校抽出見B (男子) のプロフィール

『いつも自分の表現の場として、授業に臨んでいる様子がうかがえる。自分の表現にのめり込むことが多く、その場合には口数も少なくなる。アイデアスケッチは、主題を決定するまでに数多く生み出すことができる。抽象形態への関心が強く、自主的にいろいろな形態を描いて見せてくれる。興味をもって授業に臨み、時々「次の授業は何をやるの。」と質問しに来る。普段の生活においても、一つ一つに自分のこだわりがある。しっかりとした意見を持ち、人前でも臆することなく自分の考えを発表することができ、周りにも良い影響を与えてくれる。』 (B担任談)

・学年

中学2年生 (男子17名、女子15名 計32名)

・題材名 「木の色、森の形」

(表現、自然素材をもとに)

活 動 内 容	予想される子どもの動き
①出合い ・自然散策 「森と仲良くなるう。」の提案 ・主題が話される。	・思い思いに走り回ったり、草木に触れたり、花を摘んだり、枝を拾ったりする。 ・自らの主題をイメージする。
②思いの芽生え ・描画用のボードを手にする。表現材	・思い思いの表現素材深しをする。その中でまた自然と

料がなく、自然の中から見つけだすことを知る。	主体的にかかわる。木に触れる、葉っぱを集める、土に触れる。
⑨思いの表現 ・自分なりの表現方法で表現する。	・自分が発見した表現方法を試す。
④試行錯誤 ・自らの主題の基に表現を工夫する。	・表現方法を試行錯誤する。草や木の葉の汁をこすりつける。線描する。ボードに小枝を積み上げる。
・ポンドや小刀を利用してみる。	・表現を広げる。葉を貼り付ける。土をつけてみる。
⑤完成 ・作品を発表する。	・作品に題名を付ける。
⑥共感 ・作品を鑑賞する。	・自分とは違う表現の幅を知る。新たなおもしろさ、美しさを発見する。

・検証授業の結果

自然観察林という恵まれた設備の中で実施したことで、有意義な検証授業ができた。森の中という開放的な環境で対象に触れたということは、対象とのかかわり方にも影響した。森の中での検証授業は多様な、自然とのふれあいを生み、子どもたちの様々な感じ方や、自分の表現方法を発見していく過程を見とることができた。しかし、小学校のように時間的な余裕がなく、子どもたちが自らの思いを振り返り作品を味わいながら、更に思いを深めるといったところまでは行かなかった。

(3) 抽出見の記録

抽出見を見とり、分析する方法として「対象へのかかわりと行動」「具体的な表情やつぶやき」を観察した。その上で抽出見の「感じている様子の読みとり」をしたが、できる限り客観的な読みとりにつとめた。これらの視点をもとに「感性の育みをみとる視点」を導き出した。

出合いにおける主体的な対象へのかかわりをまとめたものが点線で囲った①に当たるものとした。同じように②の点線で囲ったものが主に思いの芽生えの視点に内在する要素を集めたものである。しかし、これもまたはっきりと分けられるものではなく①の視点に導き出されるまでの過程で、すでに、意図的な対象へのかかわりが見られ様々な思いの芽生えが存在するのかもしれないし、いくつかの点線の枠に重複するものも存在するであろう。しかし、ここでは、はっきりと読みとれるもの、最もそれに近いと思われるもののみを読みとりの結果とした。

時間	子どもたちの活動	抽出現、対象へのかかわりと活動	抽出現、具体的な事情やつぶやき	感じている子どもの顔みとり	感性の育みをとる視点
授業前	・図工室へ集まる。	・一番最後の方で教室に入ってくる。 ・教室の隅の方を歩き回る。			
授業開始	・布がかけてある対象と出会う。	・他の子どもたちと同じ活動をしようとしなない。	・表情の変化に遅い。顔をだらりときせて何かだるそうな表情。	あまり授業に興味はない様子。	
5	・先生の通りに集まって座る。 ・対象の木の枝や、つる、葉っぱの組み合わせたもののシルエットから対象を連想する。	・距離はあるが対象の方をみる。 ・じっとスクリーンを見つめる。他の子どもたちの発言を聞いているが、その子どもの方は見ようとはしない。 ・鼻に顔を近づける。	・走って行って触るときには今までとは違った楽しそうな表情。 ・だるそうな表情は消えている。	・何だろう、何をさせられるんだと言った様子。 ・スクリーンを見て授業に初めて興味がわいた様子。 「何だろう。」といった感じ。	① 出合い ・「驚く」 ・「好奇心、興味と関心がわく」
10	・素材をみんなで触る。臭いを嗅ぐ。たたいて音を確かめる。	・みんなと一緒に動き出し、布の上からさかんに触る。 ・3回はど真ん中を嗅ぐ。 ・柄杓を交差、また触ってみる。 ・初めて友達と話し合う。	・「勝負だ。」と大きな声を出す。「面」などと朝道のまねをして楽しそうに遊ぶ。	・布の上から触ってみたい、中身を確かめたいという様子。 ・何か臭いがするももっともっとならめたいといった様子。 ・音がする。盛んにたたいて楽しさを覚えている様子。 ・これかと対象を触置している様子。手にして感触を感じ振り回して楽しそう。	・「好奇心、興味、関心が高まる」 ・「発見する」様々な「味わう」さらに「興味」がわく。 ・「発見する」楽しさを「味わう」 「興味、関心が高まる」 ・「驚く」「発見する」 遊びながら「味わう」
15	・布が取られ対象と出会う。 ・自由に手に取ってみる。 ・自由な働きかけ。	・太い木の幹を木給のようにして枝を折ってみる。2~3回 ・枝を持ってバットのように振り回す。刀のようにして振り回すが、蓋へ戻す。	・初めて興味がでる。話しながらたいてみる。楽しそうな表情。 ・布がとられると笑顔が消え、目をさよるさよるさせる。	・音がする。盛んにたたいて楽しさを覚えている様子。 ・これかと対象を触置している様子。手にして感触を感じ振り回して楽しそう。	
20		・わらの束を馬がわりにして遊んでいた子どもたちと一緒に、一握りのわらを手に刀代わりにして遊ぶわらがちぎれ、折れてよれよれになった。木の枝に持ち替える。	・他の子どもたちが作業に取りかかり始めると次第に遊んでいる仲間が少なくなり、蓋のつまらなそうな表情に戻り始める。	・遊びながら対象とかかわり心を開放した状態で対象から「匂いに入った形」や抵抗感を徐々に感じている様子。 ・遊びの道具とし、自然に抵抗感や可能性を想像している感じ。	② 思いの芽生え ・遊びながら「味わう」 ・素材と様々な感覚で「関わる」 ・遊びながら素材を「味わう」 ・素材の楽しさに「気づく」 ・遊びながら「味わう」
25		・曲がった木の枝をゴルフのクラブ代りに振り回し、流し台などをたたく。いろいろな枝を振り回し、比較的まっすぐな枝を2本手にする。たたいてみる。	・遊んでいるときの表情ではなく顔口になり何か確かめているような表情。意識があって尋えている表情。 ・真剣な表情で枝を切り始める。	・素材と向き合い自分の材料として確認している様子。 ・2本の枝を作品の材料として見出した様子。	・遊びながら「味わう」 ・素材の良さに「気づく」 ・素材の良さを「発見する」
30	・活動の用具が運び込まれる。 ・思い思いの活動が始まる	・床でたたいて長めの枝を折ろうとする。折れない。女の子がノコギリを使って切るのを見て自分もノコギリで切り出す。しっかり枝を握っている手の臭いを嗅ぐ。	・枝が堅くて時々しかめっ面になる。 ・真剣な表情。	・自らの作品のイメージと素材を加工する事で生まれるであろう形をイメージで結びつけている様子。これから行おうとする作業を確かめている様子。	
35		・枝を回したりノコギリを動かしたりする。枝を切るのが堅くて大変そうだ。2本の枝は手離さない。	・集中している表情。	・自分の作品のイメージと素材を加工する事で生まれるであろう形をイメージで結びつけている様子。これから行おうとする作業を確かめている様子。	③ 思いの蓄積 ・素材から「イメージを広げる」 ・制作の「イメージを広げる」
40		・うまかないか、あきらめない。 ・少し切っは枝を回し、また切る。机の上で切っていたが椅子の上でできることを確かめる。 ・ノコギリで切るのをやめ、釘を打ち出す。	・「がんばるね。」の声かけには無言。しばらくして「どうしても切りたい。」という。 ・もうだめだという表情ではない。	・自らの作品のイメージと素材を加工する事で生まれるであろう形をイメージで結びつけている様子。これから行おうとする作業を確かめている様子。	④ 共感 ・用具の特性に「気づく」 ・用具の使い方に「共感する」
45			・「かんばるね。」の声かけには無言。しばらくして「どうしても切りたい。」という。 ・もうだめだという表情ではない。	・はっきりと「ここを切る」という目的を意識している感じ。 ・イメージした作品の形に近づけたいとする気持ちが次の作業に移らせている感じ。	④ 試行錯誤 ・「試行錯誤すること」で「自ら学ぶ」 ・自ら「知識を身につけようとする」
2日目	・用具の片づけ				⑤ 思いの蓄積 ・「表そうとする」強い思い ・「イメージがある」 ・「集中している」
60	・作業終了				
65	・集合し、それぞれの作品の鑑賞会を行う。	・「小刀はどうするの。」という教師のことばに小刀を借りた友達とこころに返しに行く。 ・一番遠いところに集まり聞いている。 ・作品は離さず、紙ヤスリで磨いている。 ・名前を呼ばれ作品を先生に差し出し提示される。質問に答える。 ・友達の輪の中に入り、初めて先生の話を聞きながら話を聞く。 ・みんなで挨拶をして終了する。	・同じ様な剣をつかった真鍮と楽しそうに話す。あまり話には興味がないような感じだが、楽しそうな表情。 ・恥ずかしそうな小さな声で、「一番大変だったのは釘。」と答える。 ・しゃべり終えた後は明るい表情。 ・真剣な表情で先生の話を聞く。	・小刀で削るということに心地よさを感じている様子。 ・イメージを追って作業している様子。 ・もう作業できる環境にないなど自覚している様子。	
70	・終了				⑤ ⑥ 達成、共感 ・「振り返る」ことで発言する ・「感想を持つ」 ・友達の作品の良さに「気づく」 ・友達の作品を「味わう」
後日	・記念撮影をする。	・ポーズをとって写真に写る。	・みんなの前でも囁く自信たっぷりな表情。	・認められた喜びから自信が芽生えた様子。学級の中で自己存在を確かめた様子。	⑤ 達成 ・自分の力を感じ「感想を持つ」ことができた

時 間	子どもたちの活動	演出見、観客へのかわり目と活動	演出見、具体的な表情やつむやま	感じている子どもの顔みどり	感性の育みをみる観点
授業前	・学校内にある自然観察林前に集合する。	・制作をするときの服装、ジャージを忘れてきた。	・暑そうな表情 ・緊張した表情	・驚も驚かず、緊張した様子	
授業開始	・「自然観察林に入り、林と仲良くなって来よう」という教師からの指示を聞く。 ・何も持ち物はない。	・いち早く自然観察林の中に入って行く。 ・草を払い木の葉を引っ張ったりする。 ・くぬぎの木の葉に葉の枝からぶら下がる飛び降りる。	・硬い表情 ・「暑い、暑い。」 ・あまり楽しそうな表情ではない。	・張り切って取り組もうとする様子 ・前向きに取り組もうとする様子	① 出合い ・「興味を持つ」
5	・斜面を登ったり、木や草の観察をしたり観察をする。	・何か隠しているようにいろいろなところを歩く。 ・杉の木の幹を觸り、たいたりする。 ・杉の木の皮をはいでみる。虫を觸見する。	・「木の中に虫がいる。」 ・少し表情がほぐれる。 ・「描くものは持ってきたよ。」 ・これからの活動のイメージわいたか。の質問に対して、「いるいる。」の答え。	・興味で見た喜びを感じている様子 ・少し緊張がほぐれた感じ ・これからの取り組みはもう進んで来たことで自信が現れた様子 ・とにかくやってみようとする前向きな姿勢	・「驚く」「発見する」 ・「関心を持つ」
10	・全体で集合。 ・観察林にある素材を使い「感じた心」をイメージする。	・先生のそばで話を聞く。林の騒ぎ出ると周りを見渡す。	・「早くやろう。」	・イメージを辿るより手あたり次第、感じたことを形にしようとする様子	② 思いの芽生え ・「関心を持つ」 ・表現の対象として「かわらうとする」
15	・それぞれボードを持って活動にかかると。	・ケントボードを受け取り、小刀とボードをとる。 ・すぐ林の中に入って行く。 ・数種類の葉っぱを取り、画面にボードで貼り付けようとするが、木の葉はうまくボードに張り付かない。得意か試しなにかつづける。	・一生懸命の表情になっていく。 ・驚々しい表情	・イメージを辿るより手あたり次第、感じたことを形にしようとする様子	② 思いの芽生え ・「関心を持つ」 ・表現の対象として「かわらうとする」
20	・いろいろな自然の観察の仕方を体験する。 ・個別指導	・在の葉を発見し、貼り付けるためにボードに穴をあける。 ・もう一方所に穴をあけ、ブリッジ型に取り付ける。柔軟性を活用する。	・プラモデルで鍛えただけはあるな。の意地の声かけに「うん。」と少し笑顔。 ・現れた表情から一生懸命に自分の作品に向かおうとする表情に裏面化していく。	・作品が立体的に発展できることに気がつく。 ・しだいにアイデアが浮かんでくるといった様子	② ③ ④ 芽生え、表現、試行錯誤 ・「表そうとする」が「失敗する」 ・「発見する」つぎに「工夫する」 ・「気づく」「アイデアが生まれる」
25		・落ちていた枯れ枝を觸見する。 ・枝の皮を剥ぎ出す。削りだした木の皮をボードに貼り付ける。 ・手がボードだらけになる。木の皮や地面の土が手に着く。しかし器用に小刀を使いボードをボードに塗り広げていく。	・「ひもがほしい。」	・とにかく最初のテーマを辿うというよりは呼んでくるイメージを次々と実行している様子	③ 思いの表現 ・「発見する」 ・「イメージ」がわいてくる。 ・「表そうとする」
30		・ボードに穴をいくつかあけ、枝を折ってそこに刺し、ボードで固定しようとする。 ・何本も同じ組み合わせようとする。 ・つる状の草を觸見する。そのつるで枝をしぼろうとする。しかしぎれてしまいうまくいかない。 ・柔らかそうな草の茎を見つけ、葉を落とし、その茎で枝をしぼる。またうまくしぼれない。	・「どんな作品になるのか。」の問いに「まだ・・・」の答え ・次に向かいおうとしたが口ごもってしまう。 ・そばに来て準備してくれた観客に「うまうまいか。」と言う。	・新たなアイデアが浮かんだ様子 ・立体的な形のイメージが広がっていく感じ。 ・広がるイメージを楽しんでいる様子 ・何もかも適当な素材はないか。試行錯誤を発生にアピールしたい。意図がほしいといった様子	③ 思いの表現 ・「発見する」 ・「イメージ」がわいてくる。 ・「表そうとする」
35		・ボードで固定しようとする。 ・速乾性ではないためにまたとれてしまう。 ・笹の葉を取り、構成した枝にいくつも貼り付けようとする。 ・ボードでつけようとするがこれもとれてしまい、ケントボードの方へつける。これはうまく固定できる。 ・手についたボードに土がついて真っ黒になることを見てボードに色を付けようとする。	・「テーマ見つかったのか。」の問いに「少し。」「おご・・・かな。」の答え ・「うまくいかない。」	・作品が立体的に発展できることに気がつく。 ・しだいにアイデアが浮かんでくるといった様子	③ 思いの表現 ・「発見する」 ・「イメージ」がわいてくる。 ・「表そうとする」
40		・手にボードをつけて土をこね、それをボードにこすりつけて色を付けようとする。土と葉を一緒にこねて塗り色を出そうと試みる。 ・大きめの葉で糸状の葉を丸めて包むそれをボードに大きめの穴をあけて差し込み、花のような形にする。 ・枯れ葉をボードに貼ろうとする。	・「なんかがほしい。色がほしい。」「日の光のような。」 ・「木漏れ日のような色がほしい。」	・色を出し方を工夫したいという思いを持った様子	③ 思いの表現 ・「発見する」 ・「イメージ」がわいてくる。 ・「表そうとする」
45	・終了の準備が伝えられる。	・ちぎれてしまった自分の靴のひもも作品に縫って作品の一部として加える。	・「テーマ見つかったのか。」の問いに「少し。」「おご・・・かな。」の答え ・「うまくいかない。」	・色を出し方を工夫したいという思いを持った様子	③ 思いの表現 ・「発見する」 ・「イメージ」がわいてくる。 ・「表そうとする」
50	・集合の合図	・大きな葉で糸状の葉を丸めて包むそれをボードに大きめの穴をあけて差し込み、花のような形にする。 ・枯れ葉をボードに貼ろうとする。	・「なんかがほしい。色がほしい。」「日の光のような。」 ・「木漏れ日のような色がほしい。」	・色を出し方を工夫したいという思いを持った様子	③ 思いの表現 ・「発見する」 ・「イメージ」がわいてくる。 ・「表そうとする」
55	・自然観察林の前に集合する。	・ちぎれてしまった自分の靴のひもも作品に縫って作品の一部として加える。	・「なんかがほしい。色がほしい。」「日の光のような。」 ・「木漏れ日のような色がほしい。」	・色を出し方を工夫したいという思いを持った様子	③ 思いの表現 ・「発見する」 ・「イメージ」がわいてくる。 ・「表そうとする」
(分)		・ちぎれてしまった自分の靴のひもも作品に縫って作品の一部として加える。	・「なんかがほしい。色がほしい。」「日の光のような。」 ・「木漏れ日のような色がほしい。」	・色を出し方を工夫したいという思いを持った様子	③ 思いの表現 ・「発見する」 ・「イメージ」がわいてくる。 ・「表そうとする」
	・集合し、感想や友達作品を鑑賞し合う。	・友達に質問する。	・「作っているうちに虫になった。」 ・「これは虫だ。」 ・「つける材料が思わなかったよ。」	・作りたいという気持ちを実感している様子 ・これだというテーマを作り出した様子	⑤ 表現 ・「気づく」ことで「味わう」 ・「振り返る」 ・「思いを託す」
		・友達に質問する。	・「これ何でやったの。」と質問し、答え「これ何でやったの。」と答える。	・自分の中の意図のイメージと作品の印象を見比べながら、関わっている様子	⑥ 表現 ・「興味、関心を持つ」 ・友だちのアイデアの良さに「気づく」

4. 検証授業からの考察

(1) 抽出児の変化

○ 小学校の実践から

抽出児Aが、今回の題材に出会うことで、どのようにかわりかたが変化するかを中心にみとった。

点線枠①「出会い」は抽出児Aの対象との出会いにおける彼の変化を追っている。教師が、興味を引くような提示を工夫したことで、今までの無関心の表情とは変わり「驚く」、「好奇心」がわく、「興味」「関心」が高まるなどの様子がみられた。この心の中の波紋は、素材の楽しさやよさを自分で「発見する」「味わう」までに至っている。特に布の上からみんなと一緒に素材を触り、周りの友達が「チクチクする」「いい匂い」「いてゅーっ」「なんだーっ」「木だよ。木」等と口々に発言するのを聞きながら一緒に自分もそれを確かめ、(僕も「感じる」といったうれしそうな表情が観察できた。このことから点線枠①「出会い」は、Aが対象と出会い、自ら主体的に対象とかわることで、対象からの刺激を友達と同じように楽しそうに様々に感じている状態といえる。

点線枠②「思いの芽生え」では、①「出会い」で感じたことをもとにAが、対象を振り回したり、たたいてみたり、触ったりしながら選択し、意図的に対象とかわろうとする姿をみとることができる。最初は遊びながらかわっていたものが、この素材を選ぼうという意図が生まれる。これは、遊びながら材料のよさに「気づき」様々な素材を手取る間も2本の枝は手放さず、自分の材料として選択しているということから判断することができる。これは、遊びの中で、様々な感覚を生かしながら、対象からの刺激を感じ、新たな価値を自ら形成している状態といえる。授業後のアンケートで、どの材料が楽しかったのかの問いに対して「まっすぐの枝」というように、はっきりと、そこに自分の価値観を認識している姿がある。

点線枠③「思いの表現」は、活動のいろいろなところで表れる。②「思いの芽生え」で対象の楽しさやよさに気づき、活動の楽しさを発見した彼からは、「やってみよう」(表現してみたい)という思いが観察できた。それは、Aが無言で、25分以上も自分のイメージを追って活動するという、これまでには見られなかった姿から見とれる。表そうとする思いは活動の中で様々な対象のよさに「気づき」、活動そのものの中から釘を打つ、ノコギリで切る、小刀で削るなどの抵抗感や楽しさを「味わう」ことにつながり、作品に表そうとする思いや集中力を生んでいる。このことから、Aの心の中に「対象からの刺激を様々に感じ、新しい価値を形成しながら表そ

うとする力」が生まれたことがわかる。

続いて、点線枠④「試行錯誤」は、活動が進むに連れて、「表したい」イメージを表現しようとしたときに、活動の限界や、解決できない場面に遭遇する部分である。細く堅い枝に釘を打つことや初めて使う両刃鋸といった新たな体験は、なかなか釘が打てない、枝が思ったように切れないなどの難問を生んでいる。しかし、Aに「表したい」という強い思いがあるために、試行錯誤をしながらも表そうとする力が萎えていない。そして、解決したいと思ったときに、友達がやっている方法から「自ら学ぼう」とする主体的なかわりや、自ら「どうやったらうまくできるんだろう。」というような知識を身につけようとする姿勢が生まれている。

点線枠⑤「完成」は、Aの場合完成の枠として独立して存在するのではなく⑥「共感」とともにみられる。最初、自分の心の中では完成作品として認知していなかったが、鑑賞会において自分の作品紹介をすることで、自らの活動を「振り返る」「感想を持つ」ことができている。自分の作品がクラスの中で紹介され、認められることで、自信がついていることがわかる。その心の余裕が他の級友の作品を鑑賞することに結びついている。そして、友達と他の作品について語り、そのよさに「気づき」「味わう」ことができるようになっていく。授業後のアンケートで、「だれかすてきな作品をつくっていた人はいましたか。」の問いに級友の名前をあげ、「かっよかったから。」と感想を述べている。また後日、一人一人作品とともに写真を撮る段階では、初めて教師の前で、明るく作品の「剣」を振りかざし、ポーズをとる自信たっぷりの姿を見せることができている。このことからAが自分の力を感じ、自分の作品に対して「感想を持つ」ことができている姿をみとることができる。

点線枠⑥「共感」に関しては、前述の通りAの場合は「完成」と一緒にあった。しかし、活動の途中でもみとれ、周りの友達の活動を観察し、様々な技術を「自ら学びとろう」としている段階で、友達が行っている活動のよさに「気づく」ことができ、「共感する」ことでその方法や知識を自ら学ぼうとしている姿がみられた。ここでもやはり「他の活動のよさに気づき、自らの感想を持つ」ことができている姿をみとることができる。

以上の①～⑥までの造形活動における抽出児の対象とのかかわりから我々は、「対象からの刺激を様々に感じ、新たな価値を形成しながら表そうとする力」をAの姿にみとることができた。そして、それは一瞬のことではなく、活動全般を通してみとることができた。

○ 中学校の実践より

点線枠①「出会い」は抽出児Bの対象への主体的な

かわりから彼の「感性の育みをみとる視点」と読みとれるものを表した。しかし、ここでは最初から対象に対して興味や関心がわいたわけではない。授業後のアンケートでも「最初は何も考えてなかった。」と答えている。「驚く」「発見する」木々に「関心を持つ」など、森の中を歩き回っていろいろなものを触ったり、葉をちぎる、枝を拾うなどの活動の後に、徐々に感じている姿がみとれた。特に木に登り、空を見上げてしばらく無言の時間があつた。このときの感じたことを授業後のアンケートに答えている。「……光が射し込むところだったので、（自分が）木の一部になったような気がした。……」と書いている。この言葉からも「対象からの刺激を様々に感じている」様子がみとれる。

点線枠②「思いの芽生え」で、意図的に対象にかかわっていく姿を追った。表情が豊かになり積極的にかかわっていく姿が多くみられたのはここからである。関心を持ち、様々なイメージを追いつながらかかわろうとする姿から、対象からの刺激を様々に感じ、新たな価値を形成している姿がみとれる。授業後のアンケートでも「おもしろそう表現してみたくなった。」と答えていることから判断できる。また「ボードや小刀、ポンドなどを手にしたら表したくなった。」と答えていることから用具からも様々に感じたことで、意図的に対象にかかわった姿がみとれる。

抽出児Bは、表そうとする③「思いの表現」への変化が非常に早いのが特徴的である。次の点線枠は、②の「思いの芽生え」と③「思いの表現」、④「試行錯誤」が細かに交互に現れ、一つ一つのかかわりとしては見られなかった。意図的にかかわろうとするが、うまくいかず、試行錯誤し、「工夫する」姿があつた。その結果、新たな表現を生み出すとともに、アイデアが生まれていく姿がみとれた。そこに、強い「表そうとする力」を感じた。この様子から「対象からの刺激を様々に感じ、新たな価値を形成しながら表そうとする」姿をみとることができた。

点線枠③「思いの表現」はその後も、活動の中で見られる。そして、次々とイメージが生まれ素材にかかわっていかうとする姿が見られた。

点線枠④「試行錯誤」は、前述のようにいろいろなかわりの中に内在する形で見られたが、後半単独でも見られた。うまくいかなかったときにどうやって解決したかのアンケートの問いに対しては、「森にあったものをもっとよく感じ、こんな感じにしようというイメージを持った。」と答えている。対象を様々に感じることで、新たな「表そうとする力の源」になっていることをここにみとることができる。

点線枠⑤「完成」は、自分の作品に新たなテーマを見

つけた瞬間でもあつた。さらに時間があればということでアンケートにはさらに③「思いの表現」が発展したイメージスケッチを描いている。

点線枠⑥「共感」は、一人で活動することが多かったBが、この鑑賞会で初めて他の作品をじっくりと鑑賞する。「これ何でやったの。」と制作方法や材料について熱心に彼が質問する言葉から、友達の作品のよさに「気づく」姿をみとることができた。

(2) 抽出児作品から

○ 小学校Aの作品から

Aの作品のテーマは「剣」である。彼の行動から考えて、テーマが決定されたのは、対象と出会い、主体的にかかわり、楽しさを友達と遊ぶ中から発見した時だと推測できる。枝を振り回す中で、刀のように持つ仕草を見せた。次に様々な素材の中から比較的まっすぐな枝を2本取り出している。この時点で「剣」という本人の主題がみとれた。

また加工方法についても「かっこいいもの」という彼なりのこだわりから、友達が行っていた枝を針金で固定する制作方法ではなく、あえて困難と思われる釘による固定を試みている。このような作品に対する思いからも、「新たな価値を形成し、表そうとする姿」がみとれる。

○ 中学校Bの作品から

Bの制作活動は、ほとんど他の生徒とかわることがなく、自己との対峙の中から生み出されていた。主体的に対象とかわり、直感的に自らの材料としてしまう。「美術は好きだ」と言う要因はこのためであろうか。作品における様々な形の工夫や色を付ける試みには、これまでの様々な体験が生かされているように感じる。

授業後のアンケートの「・触ることで、・臭いを嗅ぐことで、・音を聞くことで、・見ることで、イメージを広げた。」という項目に全て丸印をつけ答えていることで、対象からの刺激を様々に感じていることがわかる。また、その他の感覚での感想の項目では、「太陽の光で反射した葉を見て、軽い気持ちになれた。」という感想も付け加えている。このアンケートの記述からもいろいろな感覚を生かし、感じていることがわかる。

作品もいろいろな思いが多様にかかわり、複雑な抽象形態をつくる。しかし、思いが直感的な積み重ねで「自らの主題から表現が生まれてくる」といった作品ではなく、作品の主題を見いだすには時間がかかった。新たな発想が、次々に生まれ、表したいという思いにあふれた作品である。今回の体験も、これからの彼の「もの」とのかかわりの中で新たな方向性を切り開く源になるように感じる。

(3) 感性が育まれる条件

我々は、様々に感じるということを通して「感性」が育まれる様子を子どもたちの活動の姿に置き換えてみようとしました。その結果、具体的な子どもたちの活動する

姿から、活動を分析することで、造形活動における「感性」が育まれるために大切な条件が見えてきた。それを6つの視点それぞれで考えてみた。

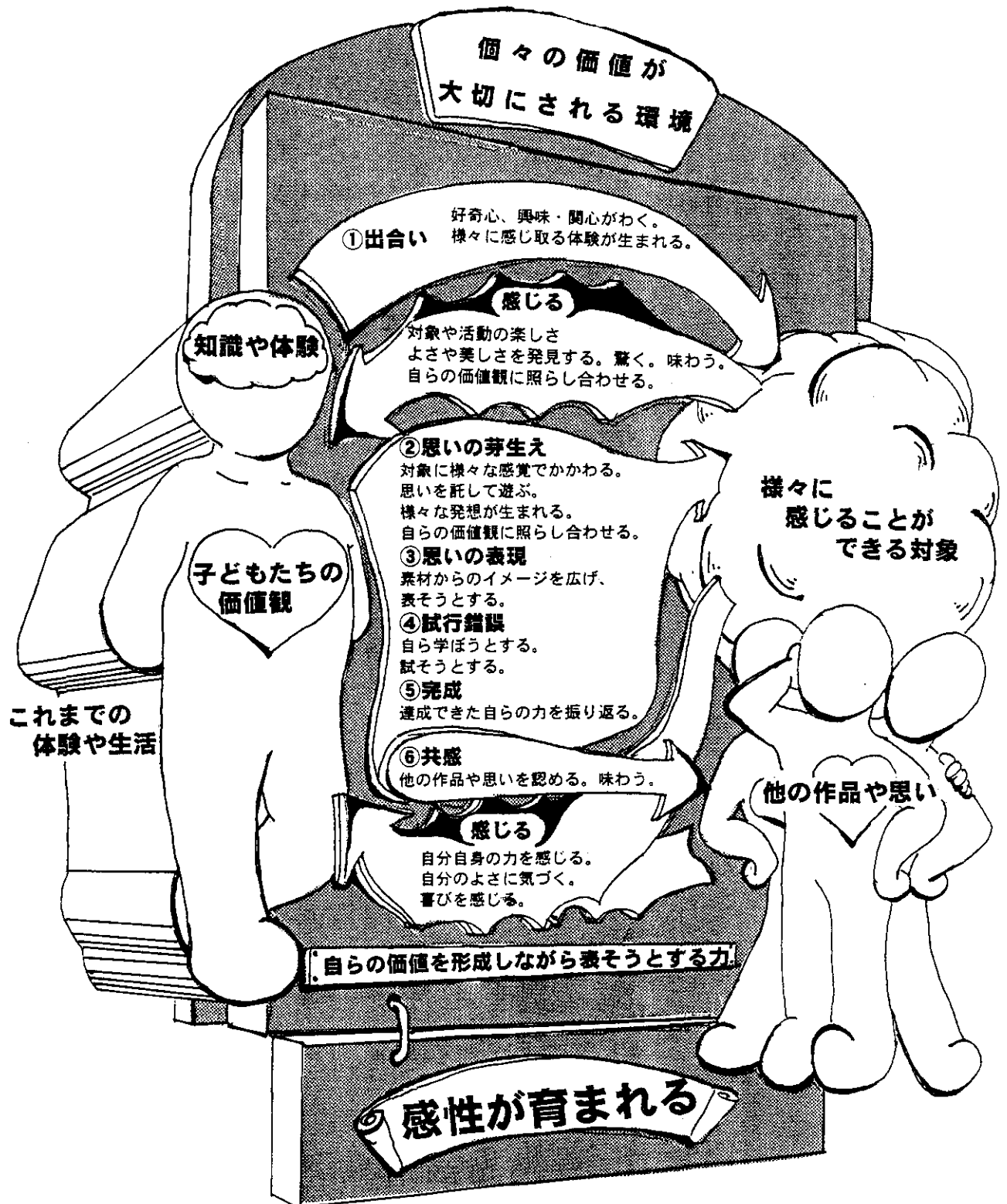
	子どもたちの活動する姿	活動する姿からのみとり	感性が育まれる条件
① 出会い	<ul style="list-style-type: none"> ・盛んに触る ・音を立てる ・枝を折ってみる ・振り回す ・いろいろな場所を歩き回る ・木に登る ・葉をちぎる ・枝や落ち葉を拾う ・触ったもの拾ったものの臭いを嗅ぐ <p>など</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・素材に興味や関心を持てた。 ・素材をいろいろな感覚で様々に感じ取ることができた。 ・遊ぼうとしたり、散策することで主体的に素材にかかわろうとした。 	<p>出合う対象が</p> <ul style="list-style-type: none"> ・素材の種類を含めた適度な「量」がある。 ・美しい、楽しい「色や形」である。 ・様々な感覚に訴える豊かな「質感」を持つ。 <p>出合う環境が</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「心を解放できる環境」である。
② 思いの芽生え	<ul style="list-style-type: none"> ・刀のように振り回す ・素材でたたく、素材をたたく ・素材を体につける ・素材と遊ぶ、素材で遊ぶ ・体全体を使って体感する ・授業の主題を聞く <p>など</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・主体的にかかわる中で、素材にいろいろなイメージを持ったことが意図的なかわりとなっていった。 ・様々な素材の中から自分の材料を選択できた。 ・素材や環境の美しさやよさを感じ取り作品のイメージを持てた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・なにかに「見立てる」「見立て遊び」を十分にする。 ・十分に遊ぶ「時間」や「場」が保証されている。 ・遊ぶ、刺激しあえる「友達」がいる。
③ 思いの表現	<ul style="list-style-type: none"> ・人とは違う表現にこだわる ・あきらめない ・無言で集中している ・初めての用具を試してみる ・表現方法を工夫する <p>など</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな方法で自分の表現を試みた。 ・長時間、無言で集中できた。 ・イメージを追い、自らの作品に主題を持つとうとした。 	<ul style="list-style-type: none"> ・活動に達成感の持てる「抵抗感」がある。 ・使いたい「用具」がある。 ・刺激しあえる「友達」がいる。
④ 試行錯誤	<ul style="list-style-type: none"> ・何度も切る方向を変える ・用具の持ち方を変える ・力の入れ方を変える ・接着方法や接着するものを変える ・友達の方法を見る先生に聞く ・素材を新たに探す <p>など</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・イメージ通りに活動できなくても、様々な方法で表現しようとした。 ・自ら工夫し、いろいろな方法を学ぼうとした。 ・自ら知識を身につけようとした。 	<ul style="list-style-type: none"> ・試行錯誤できる「時間」の余裕がある。 ・かかわれる「友達」がいる。 ・工夫できる「用具」やその他の「素材」がある。
⑤ 完成	<ul style="list-style-type: none"> ・作品に名前を付ける ・自分の作品について語る ・みんなに見せる ・発展させたアイデアスケッチを描く <p>など</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の作品に自分の力で題名をつけることができた。 ・活動を振り返り、感想を持つことができそれについて発言できた。 ・自分の力を感じている様子が見とれた。 ・更に活動を発展していこうという思いが持てた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自らの思いが、自分の力で達成できたのだという活動を振り返ることができる場がある。
⑥ 共感	<ul style="list-style-type: none"> ・友達の方法をみる ・友達に教えてもらう ・友達の発表を聞く ・感想を持つ ・友達の作品についてほめる ・活動や制作について話し合う ・まねようとする ・参考にする <p>など</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・友達の活動のよさを認め、その中から新たな方法を学ぼうとする。 ・友達の作品のよさに気づく。 ・友達の作品を味わい感想を持つ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・それぞれの作品のよさが認められる「雰囲気」がある。 ・認めてくれたり、教えてくれる「友達」がいること。

(4) 感性が育まれるプロセス

子どもたちが、対象へ主体的にかかわる造形活動からは、豊かに「感じる」ことができる活動が生まれた。その過程で子どもたちは、感じたことを自らの価値観に照

らし合わせ、新たな価値を形成しながら表そうとする力を育んだ。このプロセスこそ「豊かな感性が育まれるプロセス」である。ただ、そのためには「個々の価値が大切にされる環境」が何よりも大切であることが分かった。

感性が育まれるプロセス



感性が育まれる条件で考察したように、①「出会い」では、子どもたちが出会う対象と環境を考える必要がある。これらは、子どもたちの対象への「かかわり」の中に「感じる」ということで、よさや美しさ、楽しさや感動を生むものには、様々あるということを体験させ、大切にしたいからである。「様々に感じる」ことのできる素材は、子どもたちに「豊かに感じる」という体験を与える。豊かに感じられることで「主体的なかかわり」が生まれた。授業後のアンケートからも、視覚以外に、「触感から様々に感じ、臭いも味わい、音もさせていろいろ感じる、振り回したり、たたいたり、身につけたり、かぶったりしながら、その抵抗感を味わう」など複数の感覚で、対象にかかわろうとした結果がみとれた。

様々に感じる過程で、これまでの子どもたちの体験や生活環境によって育まれたであろう自らの価値観と照らし合わされる。抽出児のみとりの中で②「思いの芽生え」である意図的に対象にかかわる姿が認められた。美しさやよさの発見は、新たな価値観となって意図的な思いを生んだ。揺り動かされた心には、素材からのイメージを広げ、③「思いの表現」の表したいという力が育まれる。それは、様々な表したいという気持ちが、個々の思いに沿った表し方で展開されたことで証明された。子どもたちの造形活動は、子どもたちの思いに沿った活動が展開されなければならないわけである。

④「試行錯誤」や⑥「共感」は、新たな価値観や表したいという力の源になった。特に「試行錯誤」は、他の作品や活動によさを発見する「共感」を生んだ。そして、「共感」はその視点独自で存在するだけでなく、「思いの芽生え」や「思いの表現」でも確認できた。友達と自分という関係の中から、自分との差や共有できる楽しさを味わい、自分に気づくという姿がみとれる。また、「共感」からは、自ら能動的に理解しようとしたり、学ぼうとする姿勢をみとることができた。

⑤「完成」は、自己を振り返り、自らの思いが、自分の力で達成できたという満足感を生んだ。その場合、集団の中で、個々の作品のよさが認められ、その思いが大切にされるということが大切であることがわかった。つまり、「豊かな感性が育まれる」造形活動には、集団の中で、集団とともにという要素と、個々の価値が大切にされる環境という要素が大切であると思われる。

子どもたちの造形活動の中で「対象からの刺激を様々に感じ、新たな価値を形成しながら表そうとする」対象へのかかわりと「感じる」ということの繰り返しこそ「豊かな感性」の育まれるプロセスであると考えられる。

(5) 検証授業後の変化

検証授業後の抽出児のいろいろな変化について、担任

の教師にその後も引き続き観察を依頼した。

小学校抽出児Aの場合は、検証授業後、図工の授業において、漢字の中に自分の好きな絵を描く「イメージ漢字」という発想が問われる題材と、「段ボールオブジェ」という段ボールを濡らして自由な形をつくることで、自らの主題を構築していく題材を体験している。「イメージ漢字」の題材では、迷う姿が見られなかったようだ。そして「絵が楽しかった。」という感想を述べている。「段ボールオブジェ」の授業では、段ボールを水にひたし、他の子どもたちと一緒にヌルヌルとした触感を楽しめた。しかし、その後の形を作る活動では、まだ的確には自分の主題を発見できないようであったが、教師の支援で様々な形の体験が紹介されると「ひらめいた。」ということばを発し、自分の主題を生み出した。その後も糸のこ盤を使う題材では自分の形を見つけ、切り取る楽しさを味わっている姿が観察できたり、他の題材でも図工の時間のために、自ら材料を準備し、いろいろな用具を積極的に使用するなど能動的な活動がみられるようになってきている。

そこには、少しずつではあるが、自らの創造力を肯定し、表すことに楽しさやよさを感じ、自分の作品や友達の作品のよさにも気づくことのできる姿をみとることができる。普段の生活では、依然として声が小さかったり、話す相手に目を合わせられなかったりと、気になる点もあるが、遊びやグループ学習で、すぐ親しい友達と活動できるようになり、その中で「なんかわくわくしてきた。」という発言が聞かれた。少しずつ変化しているAの姿を感じる。
(A担任談)

中学校抽出児Bの場合は、美術科の活動の中では、特に変わったところはみられないが、自分の活動に自信が持っていると様子が見られ、他の生徒とのかかわりが増えていることは確かなようだ。

制作に対してもこれまでのように意欲的である。検証授業後、風景画を開始したが、「早くこのまえのように外で、描きたい。」と感想を述べ、制作にはいると、木をモチーフにした個性的な制作活動ができていた。主題もすでに制作前にイメージし、自然観察林での活動で様々に感じた体験が、新たな主題を持ちイメージする力に発展していつているようだ。その後の題材ジオラマづくりの授業では、検証授業のように自然の素材を作品に取り入れ、自分で準備したエアブラシによる制作方法に挑戦している。

普段の生活でも、検証授業後すぐ変わったところとはみとれない。しかし、苦手なことに前向きに取り組もうとする姿が感じられるようになってきている。

(B担任談)

Ⅲ 研究の成果と今後の課題

1. 研究の成果

抽出児A、Bとも、検証授業の中では、主体的に対象とかかわろうとする姿がみとれ、対象に対して心を開き、素直に感じていることがわかった。抽出児二人の検証からみとれたことを中心に、研究の成果をまとめてみた。

○子どもたちが、対象に対して様々な感覚を駆使して体感し、確かめ、味わおうとし、興味関心を持てるような題材からは、対象に対して子どもたちの、能動的な様々ななかかわりが生まれることが分かった。

○様々な感覚に訴えかける素材による造形活動において、子どもたちが対象から何を感じ、どのようにかかわるのかということをもとめるために、6つのみとりの視点
①出合い ②思いの芽生え ③思いの表現 ④試行錯誤 ⑤完成 ⑥共感を設けた。

それにより、感性が育まれていくプロセスをとらえることができた。

○豊かな感性を育む造形活動とは、どのような題材が適切なのか。子どもたちの活動を追う中で、「6つの視点」それぞれで、感性が育まれる活動の条件を考察することができた。

○豊かな感性が育まれる造形活動からは、作品や活動に新たな価値観や満足感が生まれ、自分の姿を自らが認める自己肯定の姿をみとることができた。それは自信につながり新たな意欲や能動的な活動を生むことが分かった。

○表現への思いが同一ではない友達の活動や、その作品のよさを「感じる」ことができる子どもたちの姿からは、他の作品が、同じように大切な、それぞれ価値あるものと認めることのできる「豊かな感性」をみとることができた。子どもたちがそれぞれ多様な価値を認めることができ、それぞれの価値に気づくことができる雰囲気がある授業が大切であることがわかった。

2. 今後の課題

今回の研究では、「感性」という、心の内面の変化を追うという難しさがあった。今後の課題として次のことが残った。

○今回の検証授業が「感性」を育むことのできる題材として適当であったかどうかは、今後違う題材を同じような検証方法で見とり、その差を比較検討する事で結果を出していく必要がある。その結果から、「豊かな感性を育む造形活動」のためにはどのような題材が適切なのか、その要素を探ることができるものと考え

る。

○授業後の抽出児の変化では、確かに造形活動において豊かな感じ方ができたり、対象のよさや美しさに気づくことができている、とわかる発言や行動をみとることができた。だが、果たして、それが今回の検証授業によって変化したものなのか、それとも、抽出児の生活の中で、そのような心の変化の生まれる原因や要素があったためなのかは判断することはできなかった。

○今後、この研究が、教育現場で生かされ、子どもたちの「豊かな感性を育む造形活動」の一つの手だてとなるために、より具体的な視点を検証していきたい。そのためには今後、違った視点の考察、研究方法、多くのデータ、分析方法の見直し等、長い時間をかけた観察を実施していく中で少しずつより確かな研究を進めていきたいと考える。

おわりに

豊かな「感性」を育むということは、人の心の根幹に関わることであり、その人の生き方や人間性に通じるものである。もちろん図工・美術だけが「感性」を育むものということではないが、子どもたちの造形活動の中からそうした育みの過程をみとる手応えが持てたことは今までにない試みであり、充実した研究であった。

最後に、この研究を進めるにあたり、貴重なご指導・ご助言をいただきました先生方、そして研究を支援してくださった研究担当者所属校の校長先生、並びに教職員の皆様に、心より感謝申し上げます。

【参考文献・資料】

- 竹内 博 編 『美術教育を学ぶ人のために』
世界思想社 1995年
- 片岡 徳雄 『子どもの感性を育む』
日本放送出版協会 [刊] 1990年
- 遠藤 友麗 「美術教育、1月号」論説
美術教育振興会 1998年
- 鹿児島県総合教育センター 「研究紀要 第85号」
1997年
- 広島大学附属三原小学校教育研究会
『感性を豊かにする授業』
近代文藝社 1993年

【指導助言】

- 共立女子大学教授 榎原 肇
(前川崎市総合教育センター専門員)
- 川崎市立玉川小学校長 佐藤 悠子